

東大駒場友の会



会報第34号

秋の行事のご報告

村松真理子・工藤和俊

味覚のアトリエ@駒場「東大生へ向けての食育」



フランスの料理人達と教育界の行う「味覚の一週間」日本エディションに協力するイヴェントも今年で九回目。十月二日(月)、今回は特に「種」について考えました。まず中西徹教授のレクチャー「種、食、健康と貧困を考える」。豊かな国と発展途上にある国の双方で、いかに種子の問題が人々の生活、農業だけでなく個人の命につながっているかを、経済学・社会学の観点からわかり易くお話し下さいました(二ページのご寄稿も

お読み下さい)。続いて、One Farmの池浦秀行氏に、若いメンバーがどのように「デザインやアート等の業種から食・農の世界に入っているのか、有機野菜を作るに至ったのか、地元の生産者の方達との交流はどのようなに生まれたか等、実際の経験についてうかがいました。その後、ルヴェンヴェール伊藤シェフが朝、収穫されたばかりの野菜を使ったレセピーを伝授下さり、参加会員の皆さんと学生達、総勢四〇人ほどが、バターナッツ・スクワッシュ(かぼちゃ)等の食材で一人暮らしでも作れる簡単で美味しい料理と、青梅産の有機栽培固有種の人参や小松菜等の本物の味を、ワインや(未成年は)有機ぶどうジュースと試食しました。

秋の文化イベント「東大教員と巡る駒場博物館とキャンパス」

本イベントは、会員同士および会員と教員との交流を深めることを目的として昨年より始められたものです。本年は、秋晴れに恵まれた二〇一九年十一月二日に開催され、会員三〇名と教養学部教員六名が参加しました。当日はまず、駒場博物館秋季特別展とし



て開催中の「東大野球部の歴史展」を東大公式野球部OBの篠原一郎様に解説頂きながら見学しました。第一高等学校時代まで遡る貴重な資料からは、学問のみならずスポーツにおいても全国に先駆けて新たな探求を志す学生の姿が伝わってきました。また、アメリカから輸入された「ベースボール」に「高野球部OBの中馬康氏が「野球」という訳語を付けたことや、東大野球部がこれまで六大学野球で七名の首位打者を輩出したことなど、創部百周年を迎えた東大野球部を益々応援したくなる数々のお話を伺いました。

博物館見学の後は、駒場キャンパス内のコミュニケーションプラザ三階ラウンジにて、会員と教員が楽しく語り合いながら昼食を頂きました。その後、駒場博物館折茂克哉先生の案内で、キャンパスの歴史に触れながらのキャンパスツアーを開催しました。晴天に恵まれた秋のひと時、楽しい交流会が開催できましたことを参加者ならびに関係者の皆様に感謝申し上げます。

「秋の講演会」

今年度は入学式以来、東大におけるジェンダー問題が注目された年でした。従来からキャンパスの多様性や国際化を支援してきた東大駒場友の会としても、研究と学生生活の双方の観点からこのテーマの理解を深める秋の講演会を十一月三日(土)に催しました。第一部はアメリカ文化史・大衆文化研究の専門家、能登路雅子名誉教授のご講演「教育研究のなかのジェンダー」@Konnda @Disney @Merina。アメリカ女性史研究がどのように日本に紹介されたかに始まり、西部開拓史



における女性の役割、ディズニーマーのミッキーとミニーマーの描かれ方やヒロイン像の変遷まで、興味深いジェンダー論の切り口からアメリカ文化研究についてのお話が広がりました。さらに、昭和初期の木

造分譲住宅の「文化住宅」を保存活用する活動のご経験をモデルに、歴史的な分析を日本のジェンダー論として深めて下さいました。第二部は「駒場と『ジェンダー』」昨日、今日、明日…。学生相談所の細野正人先生コーディネートによる学生四人のプレゼンテーションと、太田邦史学部長と本学の四本裕子先生、広瀬友紀先生、高橋宗五名誉教授のご参加のラウンドテーブルでした。学生たちが勉学への思いや希望をこめ、そのための環境やサークル活動等についてジェンダー的視点から紹介してくれ、太田学部長はじめ先生方が、専門的観点や経験を交えて学生たちの言葉に回答しながら、駒場の現状と社会で目指されるべきあり方について語り合いました。参加は会員と学生教員も含め九〇人ほど。続く茶話会でも懇親を深めつつ熱心に意見が交わされ、これからのキャンパスの形をともに考える貴重な機会となりました。

今年度開催した協賛の音楽会

七月十六日 第一四一回オルガン演奏会

ジルヴィウス・フォン・ケッセル（オルガン）。曲目は、J・S・バッハ、J・H・ブットシュテット、J・G・ヴァルター、W・A・モーツァルトなど

十一月八日 第一四二回オルガン演奏会

平中弓弦（オルガン）、アンダース・ユンガー・シャベロン（フルート）。曲目は、坂本日菜、ミシェル・ブラヴェ、アンダース・ダーンマン、武満徹

種、食、健康と貧困を考える

中西 徹

先進国のエリートは、自己管理の証として身体もまた「スマート」でなければならず、日々の「食」の質に注意する。最近では、欧米はもとより、日本でも、有機農産物がブームになってきた。ここでは、発展途上国の人々が直面している貧困、食と健康の問題から種子について考えたい。

世界銀行によれば、一九九〇～二〇二五年の二五年間で、世界の貧困者数は約一九億人から約七億人に、貧困率も三六%から一〇%に減少した。他方で、経済学者ピケティの『二世紀の資本』や歴史学者ハラリの『ホモ・デウス』が指摘するように、〇、一%以下の強者（超富裕層）と九九、九%以上の弱者（無用者層）の二階層社会が現実化しつつあるという観察も新しい。現代社会では、貧困緩和と格差拡大が同時に生じているのだ。そのような中で、「少なくとも一部のエリート層は、次の

ように結論する可能性がある。無用な貧しい人々の健康水準を向上させること、あるいは、標準的な健康水準を維持することさえ、意味がない、……と。』（訳書下巻一八六頁）というハラリの指摘は大きな問題を我々に提起している。

ここでまず、注意すべきは、もはや飢餓だけが貧困ではないということである。アメリカの経済学者デ・ジャンプリらは、全世界の肥満人口は飢餓人口の三倍を数え、うち六二%が発展途上国の人々であることを指摘した。それは、発展途上国における肥満人口が飢餓人口を遙かに凌駕しているという衝撃的な事実を意味する。私たちは発展途上国の肥満の問題にも、もはや無関心ではいられないのだ。

代表例としてフィリピンをとりあげよう。世界銀行によれば、かつてフィリピンは発展途上国の中では出生時平均余命は高く、一九六〇年では一八九カ国中八五位（五七、九歳）であった。ところが、その後は、医療技術も長足の進歩を遂げ、乳幼児死亡率が激減し、生活水準が上昇したにもかかわらず、二〇一七年には一九九カ国中一四四位（六九、二歳）にまで相対的順位を下げた。まさに健康における「中進国の罠」といえよう。その一因は、人々の死因の変化にある。最大の死因として挙げられていた結核や消化器系疾患が減少し、循環器系疾患、糖尿病、癌といった生活習慣病が死因として急増したためである。これまで貧困であった階層は、急速に、しかし中途半端に所得が増加するとき、ジャンクフードや化学薬品と砂糖漬けの低品質の食品を「豊かな食」と勘違いし、食と健康に

ついで情報の普及の遅れと相俟って、嬉々として食べ続ける。

この事実、超富裕層にとっては、些かも憂慮すべき問題ではない。たしかに、多くの先進国では、少子高齢化によって、製品市場規模は狭隘になり、また非熟練労働も不足している。近年、発展途上国の市場は大きな魅力であった。ところが、世界人口は増加の一途を辿り、現在は七〇億を超えた。もし、この規模が超富裕層にとつての最適水準を超えるのであれば、すなわち、過大な労働人口によって、実質賃金所得が伸び悩み、その結果、購買力や教育投資が減退し、彼らの便益を損なうことが予想されるようになれば、もはや弱者はハラリのいう「無用」以外の何ものでもない。

発展途上国は、農薬や化学肥料を多投する慣行農業とは、長い間、無縁であった。自然交配を繰り返して自ら育種した固定種を用いた少量多品種の有機農業が各農家で行われており、持続可能性と多様性を実現していた。ところが、「緑の革命」によって、短期には米やとうもろこしの収量は増加したものの、種子は、元来、農薬や化学肥料を生産してきた数社の巨大アグリビジネスが販売する、しかしエリートたちが決して食べたがらない、数種の交配種に限定されるようになっていった。現在では、毎年種子を購入し農薬や化学肥料を多投しなければならぬ一代雑種や遺伝子組換え種が農村を席巻している。当初は先進国の人々からの税金（援助）を利用し、やがては発展途上国の農民から薄皮を剥いていく自称「ソーシヤル・ビジネス」が展開されているという批判も見受けられる。



このような状況下で弱者が活路を見出せるとすれば、それは有機農業であろう。強者が選好する有機農産物は、決して大量生産はできない。生産者側の弱者が、種子から生産方法まで主導権を握り得る。現在、発展途上国では、日本を含む先進国の有機農業者との連繋を深めつつ、少なくとも農家が弱者の食卓も見据え有機農業を開始している。今後、この営為に注目したい。

（本学教授 開発経済学・フィリピン研究）

東大野球部は創部百周年

篠原 一郎

本学野球部は二〇一九年に創部百周年を祝い、その式典の写真を最後の原稿とする『野球部百年史』が間もなく刊行される。筆者はその編集委員と式典委員を務めた。

日本で最初に設立された大学なのに、東京六大学野球リーグ戦で戦っている大学の中で

最後に加盟している。旧制一高の名投手内村祐之(元プロ野球コミッショナー、野球殿堂入り)が、一九一八年に三高と早慶学習院の四校すべてに完投勝利をあげた翌年、東大に入学して、急速に創部の機運が高まった。

創部当初は殆ど対外試合をしていなかった東大が「大会」に出場するのは六年後の一九二五年、慶早明立法の五大学連盟に加盟したときのことである。すでに早慶戦は日本の「最高峰の野球戦」と世間からみられており、東大の苦戦は当初から予見されていた。加盟が疑問視されるむきもあったといつてよい。今も東大歴代第二位の勝ち星を誇る東武雄(旧制一高出身)が「テストマッチ」に好投して、正式加盟がようやく認められた。リーグ戦は同年秋がスタートである。

以来、九十年以上に渡って本学野球部は苦闘の歴史が続くのである。

大学野球の歴史は詳述できないが、全国に二十六の連盟があり、多くの連盟には下部リーグがある。下部リーグがないのは東京六、関西学生、仙台六、広島六、九州六の五連盟である。そこにはすべて一チームずつ国立大学が含まれていて、みな五つの私学と苦しい戦いを続けている。東京六大学が他の二部以下がないリーグに比べてレベルが高いのは、全国大会優勝回数などを示さなくても感覚的に理解できると思う。こうして、二部落ちの心配がない反面、毎年プロに選手を送り続けるような他大学と戦わねばならない。その結果、通算勝率一割三分程度という戦績が残るのである。全国でも屈指の勝率の低い大学野球部と認めざるを得ない。東大の最高成績は二位が一回あるだけで三位もなく、殆どが

最下位で、現在も四十二連敗中というものである(一九三二年春、二大学が欠場して三位が一度ある)。

しかし、週末に神宮球場で戦うことができない全国で唯一のリーグに在ることの意義は極めて大きく、大型連敗に苦しむことが過去何度もあったけれども、レベルが高過ぎるこの連盟から脱退したいという思いが我々から出たことはない。負けが多い分、勝ち点を取ったときの快感は何物にもかえがたい。

さて、創部と六大学加盟に寄与した二人の大投手は上述の通り、ともに一高出身である。学校創立は東大とほぼ同時期だが、野球部の創部は約三十年も早く、しかもアメリカのスポーツに日本式の武士道の魂を入れて鍛錬を重ね、日本に君臨した時代があったことを友の会の方々にはぜひ知ってもらいたい。横浜在住のアメリカ人クラブチームを倒したことは広く日本国中に伝わり、野球の普及に大きく寄与した。「野球」という訳語を考案したのも、一高野球部OBである。旧制三高との対校戦は早慶戦休止期間に日本国民の耳目を集めたし、旧制高校での大会全国大会でも二度優勝しているのである。一度も栄冠をつかんだことのない東大と違って、覇権を取った時代が一高野球部にはあったのである。

そんな一高も、一九四八年の学制改革とともに野球部は消滅し、その歴史を終えている。東大の部活動ではOB会が一高の同じ部を「先輩」と扱うこともあるようで、駒場キャンパスには一高を想起させる名前や施設が残っている。しかし、東大野球部OB会は、一高野球部をあくまで全国の出身高校の一つとみなし、一高野球部OBを東大野球部OB

会員とはしていない。一高は廃校と同時に東大に統合されたことになっており、「旧制一高(現東大教養学部)」と内外で記述されるが、野球部についてはその表現は当たらないことになる。

それでも筆者は百年史編集委員の一人として、一高野球部の業績を伝承する使命のようなものを感じている。まもなく刊行される野球部百年史にも一高小史の章を確保することができ(疑問視する東大OBもいたが)、執筆に際して九十歳になる最後の一高OBに何度も取材する機会を持つことができた。エリート校でありながら野球でも覇権を握った一高野球部の精神を東大の現役部員も学んで、いつかは優勝してもらいたい、という思いを抱きながら編集に臨んだのである。

(昭和五十九年卒、野球部OB)

地方に飛び込み、知恵やアイデアで流れを変えるおしごと

矢吹 穰

「手触り感」のなさとも言いましょうか。コンサルティング企業で働いていると、ときどき提案の先の結果が見えないことがあります。大枠を決めるまでが仕事、それが役割。数値上は大きな仕事である反面、一人一人の「ありがとう」が見えにくい。そんな中で、あるサイトで見つけた中小企業支援施設。それが富士市産業支援センター・f・B・i・z(えびず)との最初の出逢いでした。

静岡県の富士市産業支援センター・f・B・i・zは、「知恵やアイデアで流れを変える」「お金をかけずに売り上げアップをサポートす

る」中小企業支援施設です。事業者との相談は一回一時間、無料で何度でも利用できます。従来の中小企業支援とは異なり、基本的に決算書は見ない、SWOT分析等も行わない。ただ、相談者のお話を聞くなかで、本人が気づいていなかった強みを見つけ、具体的な提案を以て、結果が出るまで支援をする。そんなシンプルだけど、やってみるとなかなか大変な相談スタイルです。

わたしは、人口一万人のまち、島根県邑南町(おおなんちょう)で、f・B・i・zをモデルとした邑南町しごとづくりセンター・おおなんB・i・z(おおなんびず)のセンター長として働いております。二〇一〇年十二月末時点で、f・B・i・zをモデルとして採用し、「〇〇B・i・z」と呼ばれる中小企業支援施設は、北は北海道釧路市から、南は熊本県人吉市まで、全国二十か所の自治体に広がります。おおなんB・i・zは、人口規模が一番小さな自治体で始まったB・i・zです。

具体的な支援事例をご紹介します。昨今、話題となっている「ふるさと納税」。邑南町でも、町のファンを増やすべく、様々な商品開発が進んでおりましたが、納税額を伸ばす手法をなかなか見出せずにいました。そこで、役場の担当部署との打ち合わせで、ある提案をしました。当時、邑南町では、お米の定期便の需要があったこと(邑南町のお米は寒暖差のある土地で栽培され、美味しいと評判です)、また、百貨店が高額納税者向けにふるさと納税のサービスを提供していたことなどから、「高額商品×定期便」という組み合わせに需要があると考えました。そこで、「毎日食べられる豚」として有名な邑南町の

石見ポークを活用して「豚一頭の定期便」というアイデアを提供したところ、商品開発の末、三万円以上の寄付が必要な「豚一頭の定期便」に一四件の寄付がいただきました。

数億円規模の取引を動かしている人の中には、「たかが一四頭」と思われる方もいるかもしれませんが、約一万人の邑南町に、一四名の方が同町のファンとして寄付をしてくださったという事実は変わりません。この「手触り感」は、東京の有楽町のオフィスの中で、二二インチの液晶画面を見ながら、一万行以上のデータを扱っていたときにはなかなか感じられるものではありません。

もともと自動車のセールスマンとして始まった社会人生活。店頭に立ち、お客様を迎えし、試乗車を洗車して、先輩セールスマンのお客様の試乗をサポートする。接客以外の時間を利用して、ショールーム内のカタログを補充し、車庫証明や車両の登録のために警察署や陸運支局へ行く。自身が接客となれば、クルマの用途や趣味をお聞きし、仕様を決め、見積書を作成して、値引き交渉をして、注文をいただく。そんなやり取りの末に、「あなたが頑張ってくれたから購入した」というある証券会社の副社長からいただいた一言は、今でも忘れられません。

それが、「お金を使って売上を上げる」キャンペーンを企画する販売企画となり、グループ内における日本支社の貢献利益を管理し向上させるためのコントローラーとなり、企業相手にプロジェクト管理をするコンサルタントとなるなかで、少しずつ、少しずつ、お客様の声や「手触り感」が薄れてきました。そんな中で出逢ったのが、富士市産業支援セン

ター・f・B・i・zのセンター長・小出宗昭氏。「小さなイノベーションを起こしていく」小出氏の姿勢に共感し、大学時代から十年以上慣れ親しんだ東京という土地を離れ、地方でのチャレンジを心に決めました。

邑南町に移住して、はや四ヶ月。アメリカ留学と現地での勤務経験があり、日本では外資系IT企業でも働いていた妻の泉さんと共に、相談対応をしております。相談者からは「ここに来ると元気になる」「相談に行くたびに前向きになって帰ってこられる」とのお言葉も。これからも、小出氏から始まるビジネスモデルを体現していき、チャレンジヤーの応援者として、おおなんB・i・zを運営してまいります。

「地方だからできない」を「地方だからこそできる」に変えるべく。

(平成十九年度入学文科二類 島根県邑南町) しことづくりセンター・おおなんB・i・z

「東大生」と「東大女子」の狭間で

大林志帆

東大の女子学生によって制作されている、『biscuit』という学内向けの雑誌を「ご存じでしょうか。クスツと笑えるしうもないネタ記事から、東大で過ごす上でちょっと役に立つような情報、東大の問題点に切り込む真剣な調査記事まで、幅広い内容を掲載しています。発行は春と秋の年二回。編集部員による手渡しのほか、両キャンパスの書籍部などを中心におかれています。

この雑誌が二〇一一年に創刊された当時は、読者として女子のみが想定されていました。

男女比八二、女子同士が交流する機会が少ないという東大の環境を問題視した女子学生が、女子が「東大の女友達と話しているかのような」気持ちで読める、情報交換の場となるような雑誌を目指して創刊したのです。しかし、ありがたいことに、徐々に男性読者からの感想もいただくようになり、読者を女子だけ、あるいは男子だけに限定すること自体がそもそも時代にそぐわないのではないかと、私の代から性別を問わず楽しめる内容に方針を転換しました。男子学生からは、一部「覗き見感が減って残念」という声もありますが(笑)、「手に取りやすくなった」ととても好評です。

一方で、biscuit編集部は今も全員女子で構成されています。この背景には、男子だけで盛り上がる場の多い東大において、女子だけの場があってもいいじゃないか、という気持ちがあります。性別を限定していることを問題として指摘されることもあるのですが、今後東大に入学する女子が増えれば、女子に限定する意味もなくなり、男子の入学希望者を受け入れる日も来るでしょう。そんな純粋な動機から、近い将来、私に男子の後輩ができることを心待ちにしています。

(東京大学文学部)

人文学科社会学専修(三年)

東大駒場友の会第四回活動報告会のお知らせ

二〇二〇年六月十三日(土) 午後五時より(予定)

会場：駒場ファカルティハウス一階 セミナール室

詳細は、追ってご案内いたします。

東大駒場友の会会報【第34号】2020(令和2)年3月15日発行

東大駒場友の会 会長 浅島 誠

〒153-8902 目黒区駒場3-8-1 東京大学 駒場ファカルティハウス内

電話：03-3467-3536 FAX：03-3465-3334

メール tomonokai@post.c.u-tokyo.ac.jp

web サイト https://tomonokai.c.u-tokyo.ac.jp/

デザイン・印刷 株式会社双文社印刷

https://www.sobun-printing.co.jp



会報のバックナンバーをインターネット上でご覧いただけます。

東大駒場友の会ホームページのトップ画面に「会報バックナンバー」というボタンがありますので、そこからお入りください。

穏やかな日差しの中でゆったりとくつろぐことのできる

フランス料理

ルヴェ ソン ヴェール 駒場

東大駒場友の会会員カードをお持ちの方は食後のお飲み物が1枚につき1杯おかわり可能です。

ご注文の際にご提示くださいませ。

【営業時間】 11:00～14:30、17:00～21:00

Tel：03-5790-5931 / Fax：03-5790-1902

◎駒場ファカルティハウス内